

六、津山顕本講について（つづき）

津山に顕本講がとに角一つの形をとって発足したのは明治二十年五月二十七日である。勿論それ以前にも日容上人の教化をうけて信者になった人々があり、その人々は時にふれ折を得て日容上人の教化をうけて次第に同信の結束をつよめていた。この頃は既に岡山においても同じように上人の信者が一人二人と教化に信服して数をふやして行っていた。日容上人は明治二十年三月二十七日を以て「津山顕本講特別有志員」を定め、九戸十名の人々をはっきりと明示し、その人々に同日付で和紙罫書に墨書して、「勸進書」を与えている。その本文は次の通りである。

「与津山顕本講特別有志員書

老分 井上喜次郎・河野與六

幹事 神崎虎藏・井上幾次郎

会計 池田勝藏・林伊太郎

周旋 小林伝六・藤田定市

補助 真殿安太郎・湯本すみ

右九戸十名を以て特別有志員と相定め候事但し御書録内十六兄弟抄に云く、縦ひこれより後に信ずる男女ありとも各にはかへ思ふべからず。以上、今日も亦た此御書の如しこれより後に顕本講へ新入の人々ありとも日容は各方が今度の篤志にはかへ思うべからず候へば、各々未来霊山浄土に参るを期とし終身退転なく信心強盛に尽力可有之候事

明治廿年三月二十七日 陰曆丁酉歳三月三日

顕本講 法主

日容 花押

とあり、この全く同じ様式で書かれたものが、右記十人の人々に与えられている。特に同志の結束の為に、兄弟抄の文をひかれて、これより後の信徒は同じ信徒でも、今この最初信徒の十人とは同じではない。特に今のこの最初十人の信徒こそいつまでも最も大切な信徒であると云っている。更に十日後の同年四月六日には、この十人の特別有志員に対し、等しく次のような教訓の文書を与えている。

まず日什大正師の置文であるが、

「開祖日什大正師御置文写」

定

一 門中可得心事、大聖の御門弟六門跡并に天目等の一流皆依有法軌仏法共背大聖の化儀処不同心也直に日什は仰て帰日蓮大聖人処也門弟等深く可存知此旨者也但於下総真間有帰伏状并に起請文雖然依違法門并に法軌大聖の御儀捨申処也是れ捨悪知識之質也右日什之門弟等尋此旨於此旨違背の輩者可為謗法墮獄の罪過為後日置文状如件

嘉慶二年戊辰八月二十五日

二位僧都 日什 在判

とあり、それに続いて、

「日容曰く、吾が、

開祖日什大正師は天台の疏釈は固より一代聖教を極め宗祖の御書及び各宗の諸書に至るまで明らかめ尽し玉ひて而して後に経卷相承して一派独立し玉ふ故に、日蓮宗各派の中にも経卷相承は唯々開祖御壺人に限りて外にはかつて無き事なり。

然るに末代の我等凡僧が経卷相承じゃの一派独立じゃのと云うとも他の許さざる所否な企て及ぶ事能はざるなり。故に日容も今日独立の質だに似たれども決して経卷相承にあらず、

此は是れ昔し寂光寺日鑑上人より面受口決せし宗教宗旨なり若し疑あらば鑑師の書を見るべし、故に自己流の独立にあらざるを知るべし、

然るに日容が信徒の中に日容を離れて独立するものあり、嗚呼何なる学識、何たる卓見ありて、何なる大法を悟り得たるや、経卷相承は僧侶にすら猶許さず況や俗士に於ておや、此は是れ西方の摩天増上慢にあらずして何ぞや、之れを鵜の真似をする鵜よりも猶劣れり、鵜は水に浮く事能はざれども飛び上りて溺るる事なし、俗士の宗派独立は仏海に浮く事能わず寂光に飛上る事難し、故に遂に無間大城の火坑に陥らん事恐るべし哀れむべし慎しむべし悲しむべし尚を委くは他日御書を引て証すべきなり

明治二十年四月六日 日容 花押

井上喜次郎殿」

このように、特に経卷相承の深い意味について日容上人は寂光寺において鑑師より直受したことを自ら明言せられている。おそらく津山における説教所建立と特別有志員の撰定にあたり、信徒の中に多少の動揺があったのではないかと想像される。ここにこの前年の九月九日付の日容上人より篤信者の一人牧安次郎様宛の手紙がある。それには、

「さて過般貴地頭本講中何か論ぎ合わざるより存中別住致し候趣、就ては貴家様にも何箇と御尽力辱奉謝候何分異体同心に修行せざれば成仏道に魔障入り来れば此上一層異体同心の御信行諸君へ希候武田氏へも何卒異体同心致させ度候へ共野柄は十月上旬ならでは参り難くそれ迄にもなるべく御和融希い度く候 先は説教所設置には御尽力御礼只此上も宜しく希い度く如此御座候余は期後便候 恐々

法主日容

牧安次郎様」

となつて、既にこの頃においても信徒の間において色々意見の相違があつたやに思われる。当時岡山と津山を交互に往来して布教していた上人が、これは「岡山林にて」、津山の牧氏にあてた文である。釈尊の場合も、日蓮聖人の場合も、最初布教の途上においては種々の動揺、反動、波乱はさけられなかった。日容上人の御苦心の一端がこの手紙でしのばれる。

七、津山弘通所の近況

昭和五十六年九月廿七日、土居本典寺に於て津山本蓮寺の現住藤本聖勇上人にお会いして、津山頭本講の本拠であつた、津山弘通所の現在の状況について尋ねた。

発足当時の日容上人の布教の名ごりが遺っていると云えるが、現在は特別の布教行事はやっていないようである。又日容上人は当時他宗の寺は勿論、頭本法華宗の寺へも参詣する事を禁じていた。最も縁が深かつた津山本蓮寺や岡山本行寺でさえも参詣する事を禁じていたという。ましてや神社や他宗の寺への参詣は墮獄の悪行であると厳しくいましており、産土の八幡神社でさえも、その前を通りかかり、鳥居の前で下駄の鼻緒がきれてもそこがかがんで頭を下げては参詣したと思われるからいけない、そのまま通り過ぎてから緒をすげかえよと教えていたと聞いている。まことにその徹底した厳しさは驚くばかりである。

しかし現在は津山でも岡山でも、かつての頭本弘通所の子孫の人々はそれぞれ頭本法華宗の寺に参詣しているという。

晩年の日容上人は、本多日生上人が管長職についてから大学林長と復帰されたのだから、この